

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 8 号

2015年3月

同 朋 大 学

はしがき

この要旨集は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、2014年度に本学において博士の学位を授与した者の「論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨」を収録したものである。

学位記番号に記した学位規則第3条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	学位論文題目
文博甲第 12 号	博士（文学）	高木 祐紀	曾我量深の思想に関する研究

氏名(本籍地)	高木祐紀(愛知県)		
学位の種類	博士(文学)[同朋大学]		
学位記番号	文博甲第12号		
学位授与月日	平成27年3月23日		
学位授与の要件	同朋大学学位規定第3条第1項該当		
学位論文の題目	曾我量深の思想に関する研究		
論文審査委員	主査	本学特任教授	博士(文学) 尾畑文正
	副査	本学教授	博士(文学) 田代俊孝
	副査	本学特任教授	廣瀬 惺
	副査	大谷大学教授	博士(文学) 織田顕祐

14-8702 高木祐紀

「曾我量深の思想に関する研究」

内容の要旨

(構成)

はじめに

第一章 曾我における法蔵菩薩の了解

第一節 曾我の思想区分

第二節 曾我における法蔵菩薩の了解

第二章 曾我における唯識思想について

第一節 曾我における唯識理解について

第二節 「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」について

第一項 本論の内容について

第二項 阿頼耶識について

第三項 三位と三願の比較

第四項 三位と三願転入

第三節 「如来表現の範疇としての三心観」について

第一項 問題の所在

第二項 本論の内容について

第三項 『成唯識論』に説かれる阿頼耶識と曾我の解釈の比較

第四項 三心について

	第五項	三心と三相の意義
	第六項	安田理深・仲野良俊の解釈を通して
第四節		「法蔵菩薩」について
	第一項	本論の内容について
	第二項	第二項 「阿頼耶識」・「種子」・「現行」について
	第三項	第三項 阿頼耶識と機の深信
第五節		小結
第三章		曾我の還相回向観
	第一節	問題の所在
	第二節	親鸞の還相回向理解
	第三節	還相回向に関する先行研究について
	第四節	曾我の還相回向理解
	第五節	中期と後期の比較と考察
	第六節	小結

おわりに

(内容)

曾我量深（一八七五～一九七一）は、真宗大谷派の僧侶であり、現代の真宗教学に大きな影響を与えた。近年、曾我の思想について、研究論文が発表されている。例えば、水島見一「曾我量深の自覚道（上）―「法蔵菩薩」論―」（『親鸞教学』九八）、「曾我量深の自覚道（下）―「法蔵菩薩」論―」（『親鸞教学』九九）といった論文が発表され、曾我量深における法蔵菩薩の思想について研究されている。また、安西廉「曾我量深における求道の探求―「精神主義」批判を通して―」（『真宗研究』五八）では、曾我量深と清沢満之の値遇の面から研究されている。他に、曾我量深の了解を基にして研究されている論文も数多くある。例えば、池田勇諦、廣瀬惺、本多弘之、寺川俊昭、安富信哉など数多くの著者をあげることができる。

このように、曾我に関する研究が進んでいる状況であり、曾我量深の思想に対する関心が高まっているのである。本論文は「曾我量深の思想に関する研究」と題して、曾我の思想を研究するものである。曾我の思想の中で、筆者は、曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」、そして、曾我量深の還相回向観について考察する。なぜならば、今までの研究では解明されていない課題があるからである。

まず、「法蔵菩薩阿頼耶識論」である。「法蔵菩薩阿頼耶識論」とは、「『唯識』の阿頼耶識といふのは、即ち『大無量寿経』に説いてある所の弥陀の因位の法蔵菩薩である」（『曾我量深選集第五巻』一五七頁）という曾我量深独自の論である。

「法蔵菩薩阿頼耶識論」に関する主な先行研究として、平川彰「如来蔵としての法蔵菩

薩」(『浄土教の思想と文化』)の文献学の立場から著された論文と、松原祐善「法蔵菩薩論」(『大谷学報』五三一三)の真宗学の立場から著された論文に分けることができる。筆者は、これら先行研究において曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」が十分に解明されていないと考える立場である。解明されていない課題とは、曾我が『成唯識論』をどのように解釈したかということである。そこで筆者は曾我が、阿頼耶識と法蔵菩薩を結び付けた理由を考察しなければならないとの問題関心から、先ず、唯識は『成唯識論』を見ていく必要があり、法蔵菩薩は『大無量寿経』や『教行信証』を見ていく必要があると考えて、これらの課題について、確認的に、丁寧に論究する。

こうした課題がある中で、まず、第一章では、曾我の思想の区分けと、法蔵菩薩の思索の展開について考察を行う。曾我の思想の区分けについて、先行研究では、曾我の生活史や論文の内容から区分けされている。筆者は、曾我が唯識を基礎として学んでいることに着目し、今までの先行研究とは異なる唯識という視点によって曾我の思想展開の区分けを行い、三期に分ける。前期は唯識に関する論文を執筆している一九一六年までである。中期は、唯識と『大無量寿経』や法蔵菩薩の関係に言及する論文が見られる一九四二年までである。そして、後期はそれ以降であり、唯識への言及は少なく、主に『教行信証』に関して曾我の思索を展開しているのである。このように、唯識との関わりから区分けを行うことによって、今までの先行研究とは異なる視点で、曾我の思索を明らかにすることができる。と考える。

そして、曾我は、法蔵菩薩を信念の主体であるとして独自に了解している。曾我は、『大無量寿経』に説かれている文をそのまま解釈したのではなく、主体的に法蔵菩薩を了解する。その了解は、従来の恩寵的信仰との決別である。それは曾我自身、法蔵菩薩は自我を打ち破って働くものでなければならないという問題意識があったと考えられる。如来を拝む恩寵的信仰から法蔵菩薩を信念の主体と見た主体的信仰への転換が、曾我の眼目であると言える。と筆者は確認する。

次に、第二章では、「法蔵菩薩阿頼耶識論」に関する論文や著作を取り上げ考察する。曾我の唯識思想に関係する論文や著作として「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」、「如来表現の範疇としての三心観」、「法蔵菩薩」の三つがあげられる。¹それらを考察していくことによって、「法蔵菩薩阿頼耶識論」とはいかなる意味を持ち、また我々にとってどのような意義があるのか明らかすることができるが本章の主題である。

まず、「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」では、阿頼耶識の三位に『大無量寿経』の三願を当てはめている。『成唯識論』にある三位の構造と『大無量寿経』にある三願の構造を比較する。そして、筆者は、曾我の説を受けて、三願転入と阿頼耶識における新たな展開を提示する。そのことによって、三願転入が我々にとってどのように働くのかが図に表され明確になると考えて図式化する。

次に、「如来表現の範疇としての三心観」では、阿頼耶識の三相に第十八願の三心を当てており、法蔵菩薩が発した第十八願にある三心が主題となる。阿頼耶識の三相と三心を比較し考察する。さらに曾我の唯識教学を受けた安田理深・仲野良俊の先行研究によって、曾我の解釈が我々にとってどのような意味を持つのか明らかにする。その考察によって、曾我は、至心→信樂→欲生という三心の展開を通して、『成唯識論』にある三相を解釈したことを論じる。それは従果向因から、三心の内実を明らかにすることにつながるのである。

そして次に、「法蔵菩薩」から考察を行う。曾我は種子を本願、現行を念仏とする解釈をしている。それを三法展転因果同時から検討する。その検討により、阿頼耶識に法蔵菩薩の本願が種子として植え付けられることを明らかにする。それは、阿頼耶識に本願の種子が植え付けられていくのである。植え付けられた本願によって、念仏が現行する。その本願と念仏の関係を三法展転因果同時から明らかにし、図に表す。

こうした考察によって、「法蔵菩薩阿頼耶識論」において、法蔵菩薩と阿頼耶識、それぞれ表される内容が明らかする。「法蔵菩薩阿頼耶識論」の内容とは、法蔵菩薩イコール阿頼耶識というだけでは不十分である。「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」、「如来表現の範疇としての三心観」、「法蔵菩薩」の内容を検討しなければならない。「法蔵菩薩」は、法蔵菩薩の三願、そして本願の三心を表すのである。そして「阿頼耶識」は、阿頼耶識の三位と三相を表すのである。したがって、「法蔵菩薩阿頼耶識論」とは、法蔵菩薩が発した三願と、第十八願の三心が、我々にどのように働くかということ、阿頼耶識の三位と三相、さらには三法展転因果同時によって示す。

次に第三章では、曾我の還相回向観が考察される。還相回向に関しては多くの先行研究が存在し、今もなお研究され続けている課題である。多くの先行研究では、曾我の還相回向に関する言葉が引用され研究されている。その理由について、長谷正當が次のように述べる。

真宗の教学者の中で、曾我ほど二種回向についての様々な見解の間を揺れ動いている人はいないかと思われます。そのことは、曾我ほど二種回向の複雑で微妙な局面に分け入って深く思索した人はいないことを示しています。（『教行信証』と二種回向の問題）「真宗教学研究」三二 一四頁

曾我は「二種回向についての様々な見解の間を揺れ動いて」おり、「二種回向の複雑で微妙な局面に分け入って深く思索した」という理由から、還相回向の研究では曾我の言葉が引用されることになるのであろう。したがって、親鸞の還相回向についての先行研究では、曾我量深の思索をもとにして研究されているものが多く見受けられるのである。その点を考えると、今日、還相回向の議論の基礎となっているのは、やはり曾我の還相回向理解であると考えられる。

そこで課題としてあげられることは、曾我が「二種回向についての様々な見解の間を揺れ動いている」ことを整理し、筆者自身が還相回向についてどのような立場に立つか明確にしていかなければならない点がある。そのためにまず、親鸞の還相回向に関する記述と

親鸞の還相回向について言及されている先行研究が概観される。還相回向の先行研究は様々な見解に分かれており、先行研究を分類整理しなければならない。この先行研究の分類整理も、今までなされていなかった課題であると言える。こうして先行研究を踏まえた上で、曾我量深の還相回向理解について明らかにし、還相回向の持つ意味について考察する。

還相回向には、「(1) 往相回向から還相回向に回入する」や「(2) 衆生の信を成立せしめる根拠」と二様の理解があるために、論拠によって理解が異なってくるのである。そして、曾我自身の見解も中期と後期で異なっている。考察によって、曾我は中期においては親鸞と出遇い、後期においては清沢満之と出遇ったということを明らかにする。さらに、曾我の還相回向観は、流転輪廻の凡夫、無有出離之縁であるという自覚の上に見ていく必要がある。それは、悪人の自覚という往相から、自然に還相回向の徳が具わると考えられるのである。我々は、悪人の自覚の上に立つことによって、すべての人ともものが還相回向だと受け取ることができ、またその自覚の上に自然に還相回向が働いていると考えられるのである。

以上、三章にわたって曾我の思想を展開する中で、筆者は全ての章において機の深信が根底にあることを明確にする。それは、罪惡生死の凡夫という自覚の上に曾我が思索を展開したことを示すものである。第一章では、法蔵菩薩を主体的な信仰によって見ているが、それは曾我にとって、迷いの存在である自己を自覚することである。第二章では、三心を三相において見ていくと、そこには機の深信がある。また、第三章においても、還相回向を、悪人の自覚から了解しているのである。このように曾我の思想の根底には、機の深信があると言える。こうして、筆者は、曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識」の内実と、曾我の還相回向観を明らかにすることによって、曾我の思想の一端を明らかにする。